

# 小・中・高を円滑につなぐ進路学習に関する研究

—学区内における児童・生徒の交流学习を通して—

M13EP009

古屋 友香

## 1. はじめに

「児童が、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へうまく適応できず、不登校等の問題行動につながっていく事態」(中央教育審議会初等中等教育分科会 学校段階間の連携・接続等に関する作業部会, 2012) は、中1ギャップと呼ばれる。

文部科学省 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、学年別不登校数は、小学6年では8,010名なのに対し、中学1年では22,390名と、約2.8倍に増加している。山梨県ではおよそ3.5倍となっており、全国値よりも深刻な状況にある。また、30日以上欠席した不登校の小・中学生は、全国で前年度より7,000人増加し、山梨県内も同様に増加の傾向であることが報じられた。不登校児童生徒を減らす取り組みが急務になっている。

昨年度の研究では、中1ギャップを未然防止するためには、小・中学校の双方向から協力をして、適切な指導や児童の学習を通して対応をすることが必要であると実感した。また、小学校で児童と接する中で、児童にとっての中学校進学への意識というのは、単に義務教育の延長線上にある学校へ進むといった認識であることが見えてきた。中学進学前の時期に、この時期が大切な成長の節目であると意識させ、進学への心がまえをもつことが、進学時の不安の軽減にもつながることがわかった(古屋, 2013)。

そこで、今年度は昨年の研究の継続として、小学校と中学校接続時の交流学习、また、中学校と高等学校接続時の交流学习の2本柱を設け、上級学校進学時の円滑な接続の在り方

を検討することとした。

## 2. 研究の目的

本研究は、異年齢交流などを含む事前学習を通して、学校間接続時の不安軽減の一助となり得る具体的方策について探ることを目的としている。中学校を中核とし、中学校区にある小学校2校と中学校との交流学习プロジェクト、また、同じく中学校区にある高等学校1校と中学校との交流学习プロジェクトを行う。

小学校との交流学习は、「すてっぷ」とし、昨年度研究した「㊦そ野から ㊧を ㊨なごう ㊩プロジェクト」の略称として用いたものである。この取組が小学校卒業という山の頂上にたどり着ける手助けとなり、児童が中学校生活への一步(=step)を、希望をもって踏み出せるようなプロジェクトとした。

一方高等学校との交流学习は、「㊪自主的に㊫生みだし ㊬見つける ㊭プロジェクト」の略称で「JUMP」とし、中学校から高等学校へと、自らの進路希望を切り拓き、より高い夢の実現に向けて目標をもち行動できる(=jump)ようなプロジェクトとした。

同じ学区にある学校の教員同士教員が共通認識をもちながら支援し合うことを前提とし、授業実践を通して生徒や児童の更なる成長の可能性を見いだす研究としたい。

## 3. 研究の方法

### (1) 「すてっぷ」

実習校：山梨県内公立A小学校、  
B小学校

実習期間：2014年6月～2015年1月

授業実践：A小学校6年（24名）

B小学校6年（24名）

※両校はA中学校区にある

(2)「JUMP」

実習校：山梨県内公立A中学校（勤務校）

実習期間：2014年6月～2014年12月

授業実践：3年A組（24名）

3年B組（25名）

※協力校：山梨県立A高等学校

(3) 授業実践による方法

授業内容は、児童や生徒のもつ不安感を和らげ、進学する学校の生活により円滑に適應できるようになることを目指した。そのために、学校間の違いに気付き、夢や希望、進学への高い目標をもち、進学することを前向きに捉えられるような構成とした。表1に研究の流れを示す。

①「すてっぷ」について

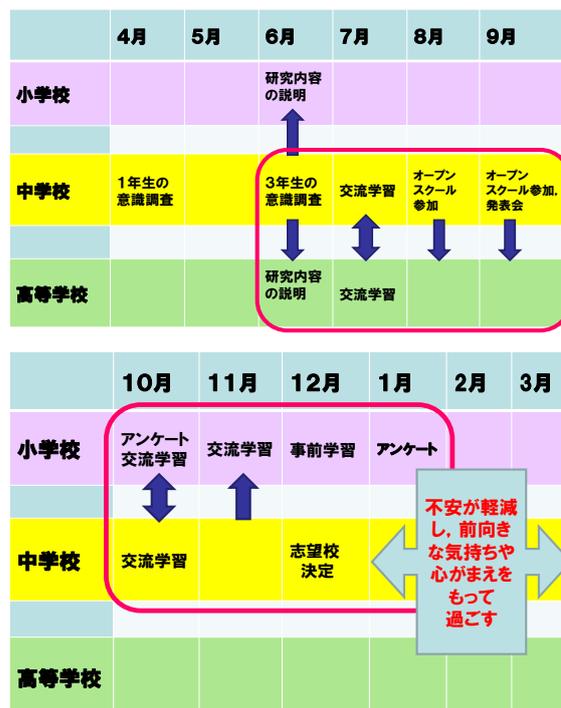
- ・ 6月：小学校への研究内容説明と依頼
- ・ 10月：事前アンケート実施
- ・ 10～11月：1回目の授業実施
- ・ 12月：2回目の授業実施
- ・ 1月：事後アンケート実施

②「JUMP」について

- ・ 6月：中学生への高校に対する意識調査、高校への研究内容説明と依頼
- ・ 7月：高校1年生19名と中学生徒の交流学習
- ・ 8～9月：オープンスクール参加
- ・ 9月：進路学習発表会
- ・ 12月：志望校決定

小学生も中学生も、学習後から卒業までの期間を、前向きな気持ちをもち送ることが大切である。また、進学に対する心がまえを新たにし、目標をもつことで、毎日をより充実したものと思わせたい。なお、具体的な方法は次の結果と考察の中で詳しく触れる。

表1 研究の流れ



4. 研究の結果と考察

(1)「すてっぷ」授業実践の結果と考察

①授業実践の概要

表2に、「すてっぷ」の授業計画を示す。「すてっぷ①」では、事前アンケートをもとに作成した児童が知りたいことを紹介する資料や中学生との交流を通して、児童が中学校生活の理解を深め、疑問や不安を解決できるようにした。「すてっぷ②」では、「すてっぷ①」で得た知識や中学生からのビデオレターの内容をもとに、各自が改めて自分の生活習慣や学習習慣の現状を見つめ、アンケートの自己評価をもとに、残された小学校生活で努力していく点を目標に掲げた。その後の生活で目標達成への意識を高めることを期待し、教室に掲示した。

表2 授業計画

時間	学 習 内 容	学 習 目 標	留 意 点
第1時	すてっぷ①【相違点を埋め理解を深める】 事前アンケートによる児童の知りたいことが明らかになるよう、資料や中学生との交流により、中学校の生活全般をより明確に捉え、理解する。	・ 中学校の学習や生活の様子について知識を得、理解を深める ・ 不明な点が明らかになることにより、中学進学への意欲や関心が高まる	多くの情報を提示することにより、中学校の生活を具体的に理解し、心構えができる。
第2時	すてっぷ②【進学に向けての目標をもつ】 入学までに身につけたい力を再確認し、残りの小学校生活で出来ることを考え、目標を設定する。	・ 充実した中学校生活を送るために、今から意識しておきたい力を知る。 ・ 各自の課題から、卒業までに取り組む具体的な目標をつくる。	各自が自分の目標を明確にし、それを可視化することで、学級として進学への意識が高まる。

②児童の変容をみとるための工夫

プロジェクトの前後では、同一内容のアンケート(図1)を行った。アンケートにより、児童は自分の生活を客観的に振り返ることが可能となる。同時に、アンケート結果は生活改善に向けた指標を示す。数値の変化から、授業を通した児童の変容を見ることとした。

また、授業の中ではプロジェクトシート(図2)を使用した。授業前の0合目、授業後の10合目のそれぞれの時点で、「中学校とはどんなところでしょう?」という同一の問いかけをした。授業前後の記述内容の変化で、児童の中学校生活に対する思いや心がまえの変容を見とることとした。また、1枚の用紙を使用することで、「学習者にとっては、自分の成長過程が具体的内容を伴って可視的に把握でき、学習の成果を振り返ることが可能になる(堀, 2013)」。このようなOPPシートの考え方にに基づき、プロジェクトシートを作成し、児童が授業毎の学びの成果を記述できるよう工夫した。なお、このシートは昨年の研究でも使用し、ポートフォリオ評価として実践したものである。

今の自分は...?アンケート  
6年組氏名( ) 10月19日(木)

★運動会では大活躍をし、充実した小学校生活をおくっていることでしょう。  
"最上級生としての今の自分"について考えて、下のアンケートに○をつけてください。

4-いつもそう 3-時々そう 2-あまりそうではない 1-全くそうではない

①朝は自分で起きている	4	3	2	1
②学校の決まりを守っている	4	3	2	1
③友だちにしっかり注意できる	4	3	2	1
④まわりの人を大切にしている	4	3	2	1
⑤授業中、たくさん発言をする	4	3	2	1
⑥学校の行事に進んで取り組んでいる	4	3	2	1
⑦自主学習を毎日している	4	3	2	1
⑧わからないことは先生に聞いて疑問を解決している	4	3	2	1
⑨自分の考えを伝えることができる	4	3	2	1
⑩大きな返事で意思を示せる	4	3	2	1

図1 アンケート(記入例)

すそ野から てをつなごうプロジェクト  
( ) 小学校 6年2番氏名( )

10合目 プロジェクトを終えて、中学校とはどんなところでしょう?  
プロジェクトを終えての感想は、安心しました。先はいからのメッセージで大変だけれど毎日コンコンやればかならずできるといったのでとても勉強になりました。

多合目 12月4日(木)  
今日わかったことを書いてください。  
中学校は、生活リズムがしかりしてれば中学校でもしかりと生活できるということが分かった。

5合目 11月4日(火) 前の2です!!!  
今日わかったことを書いてください。  
勉強は、コンコンやることかたいてい。ノートをつけて復習する。月1回は大きな行事があった。特に部活では、なんの部活をやっても損はない。とにかく、勉強の復習や部活は、じかにやる。

1合目 10月14日(火)  
中学校で楽しみなことは何ですか?  
部活をやりたい。  
どんな授業があるのか楽しみ。  
知りたいことは何ですか?  
勉強の難かしさ。  
部活の大変さ。  
心配なことはありますか?  
勉強がついていけなくなること。  
部活はしかりできるか。

0合目 中学校とはどんなところでしょう?  
小学校より勉強もむずかしい。  
小学校は、部活はないけど中学校がある。  
小学校よりレベルが上がる。

図2 プロジェクトシート(記入例)

③授業実践の成果と課題

(a)事前アンケートから(10月14日実施)

A小学校、B小学校両校6学年児童に、プロジェクト前の、中学校に対する意識を調査するアンケート(図2, 1合目)を行った。結果を表3-1, 2に示す。学校ごとに多少内容の差はあるものの、学校の生活に関すること、学習に関すること、人間関係に関することに関心が強いことがわかる。

表3-1 中学校に対する意識(A小学校)

ワークシート1合目 A小まとも

楽しみなこと	
大多数共通の意識	少数からでた意識
1 部活動	図書室
2 新しい友達	
3 学校行事	
4 勉強	
心配なこと	
大多数共通の意識	少数からでた意識
1 勉強	時間についていけるか、グループ意識が高くなること
2 新しい友達	
3 部活・上下関係	
知りたいこと	
大多数共通の意識	少数からでた意識
1 勉強	何クラスあるか、どんな教室か、友達関係、自分がどこまで通用するか
2 部活動	
3 行事	
3 先輩	
3 小・中の違い	

表 3-2 中学校に対する意識 (B小学校)  
ワークシート1合目 B小まとめ

楽しみなこと	
大多数共通の意識	少数からでた意識
1 部活動	みんなと遊ぶ
2 学校行事	
3 新しい友達	
4 授業	
心配なこと	
大多数共通の意識	少数からでた意識
1 勉強	宿題・いじめ・部活
2 先輩	
3 仲間と馴染めるか	
知りたいこと	
大多数共通の意識	少数からでた意識
1 宿題	給食・どんな所か・水筒をもって行ってよいか
2 帰る時間	
3 勉強	
3 決まりごと	
3 部活	

(b) 第1時 10月30日実施 (B小学校)

11月4日実施 (A小学校)

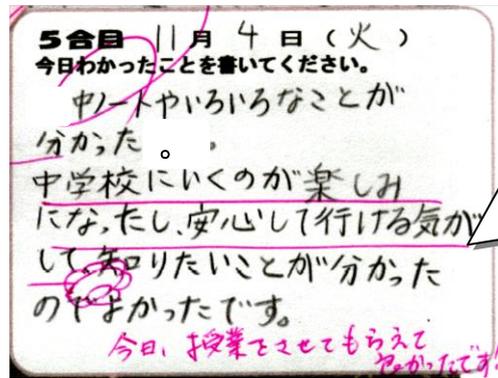
事前アンケートから明らかになった中学校について知りたいことについて、主にプレゼンテーションソフトを教材として用いて授業を行うことで、新しい発見をすることをねらいとした。同時に、この教材は児童の中学校に対する既有的のあいまいな認識と実際の中学校の様子との差に気づき、中学校生活に関する児童の知識が明確になることもねらいとして作成した。

授業の際、筆者が担任をしている中学生4名も参加した。中学校生活がより具体的になるよう、教科書や家庭学習ノートを持参し、小グループでの交流時間も設けた。(図3) 児童が入学前に中学校について詳しく知る機会として、中学に対して不安な気持ちや心配に思うことへの解消につながることを期待した。

授業後の児童の記述からは、知りたかったことが明らかになり、安心感を得られたもの(図4-1)や、授業前よりも中学校に対する興味が高まり、より知りたいと思うようになったもの(図4-2)が多く見られた。教師が一方向的に説明する授業ではなく、中学生との生の交流をもてたことで、より詳しく進学先の具体的なイメージを得られたことは、第1時の大きな成果であると考えられる。

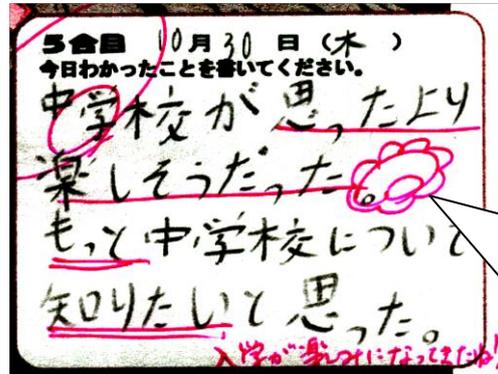


図3 中学生と交流する小学生



事前学習により安心感を得たことがわかる。

図4-1 A女児の記述



中学に対しての楽しみな気持ちがかえる。

図4-2 B男児の記述

(c) 第2時 12月4日 (A小学校)

12月16日 (B小学校)

第2時では、図1のアンケート項目の自己評価集計をもとに、中学進学を前に今の生活の中で改善の必要のある項目を児童自身が確認した。各自の課題を克服するための目標を掲げ、日々の生活の中で意識を高められるようにした。

アンケート項目は、中学入学に向けて意識

したい5つの力（古屋，2013）①自律的な生活習慣を身に付ける力 ②良好な友人関係をつくる力 ③学校の活動に熱心に取り組む力 ④自分で学ぶ力 ⑤考えや意思を伝える力に分類し、学級としてどの部分が強みなのか、また、どの部分に更に力を入れればよいのかを授業内で紹介した。その後、中学1年生からのビデオレターで、実際の中学生が5つの力について頑張っていることを伝えた。1学年上級の、顔見知りの先輩方からの声に、熱心に耳を傾ける児童の様子があった。

その後、児童が自分のアンケート結果を見ながら、前述の5つの力の中で卒業までの小学校生活の中で意識したいことを考える時間を設けた。各自がたてた目標は、付箋紙に記入し、授業後の学校生活でも意識できるよう、教室掲示をした。クラスの仲間の掲げた目標を共有でき、また、常に目に入る所にあることで、視覚的に意識を高められるという利点がある。様子を、図5に示す。



図5 目標の教室掲示

授業を終え、多くの児童の学習感想からは、自分に欠けている部分を理解した上で、その向上のために力を入れたい部分が、具体化されて示されていた。例えば、次の図6-1の記述からは、自分の掲げる目標は、自分のためになることを理解している様子が読みとれる。また、図6-2の児童の記述には、目標を実行に移そうという意識がみられる。このように、中学校で必要な力を高めるために、残りの小

学校生活を更に高い意識をもって過ごしていこうという前向きさが生まれたことは、成果と言えよう。

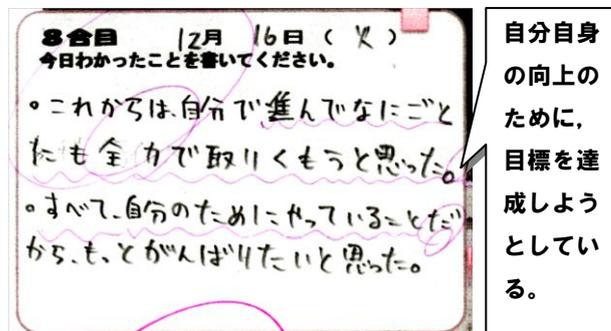


図6-1 C女児の記述

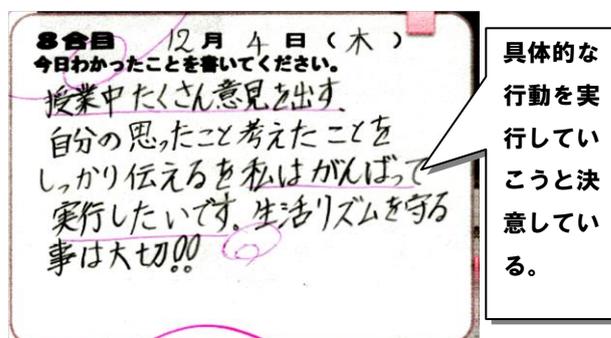


図6-2 D女児の記述

④プロジェクトを通じた考察

(a) アンケート結果から

2校の小学校児童にプロジェクト事前、事後に行ったアンケート結果を以下図7に示す。

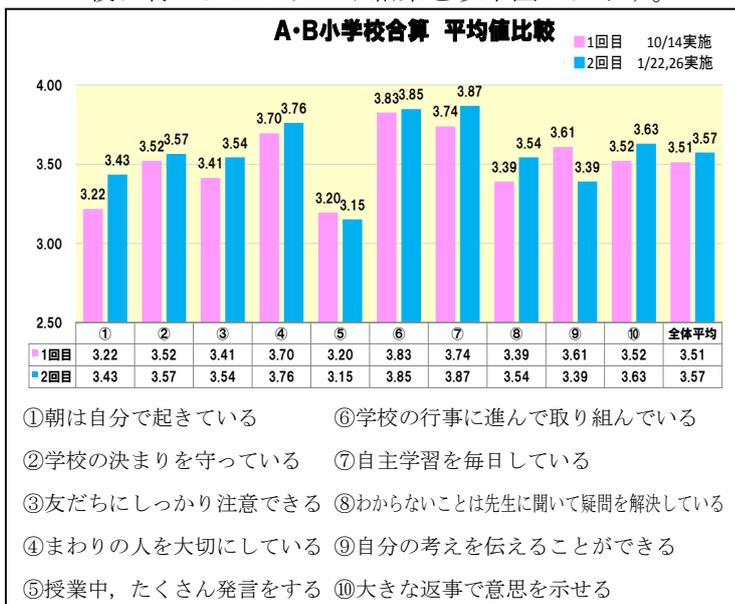


図7 2校合算の平均値比較

グラフ全体から、全ての項目において3以上の平均値を示している。A中学校区内の児童は、何事にも意欲的に小学校生活を送っていることが読み取れる。平均値を事前、事後で比較してみると、10項目中8項目における数値の上昇が見られる。これは、自身の生活を客観的にとらえ、中学進学前に改善を試みたことを示しており、プロジェクト前以上に中学校で求められる力を意識して日々の生活を送っていると考えられる。事前の意識づくりに関しては、一定の効果があったと言える。

数値の減少が見られた2項目は、どちらも言語活動に関する項目である。このことから、学区の6年生の傾向として、自分の思いや考えを言葉にして伝えることに課題があると考えられる。今後は、学区内の小・中が連携して、発話力や伝え合う力の向上をねらった活動を計画的に行うことが必要なのではないだろうか。

(b) 記述の内容から

児童のプロジェクトシート0合目と10合目の記述を比較してみたい。学習前の0合目の時点でもっていた、中学校に対する不安や漠然とした認識が、プロジェクトを終えた後には、進学に希望をもち、今自分に必要なことを認識した記述(図8-1)へと変化したり、小学校と中学校との日常生活におけるつながりを捉えられた記述(図8-2)へと変化したりしている。

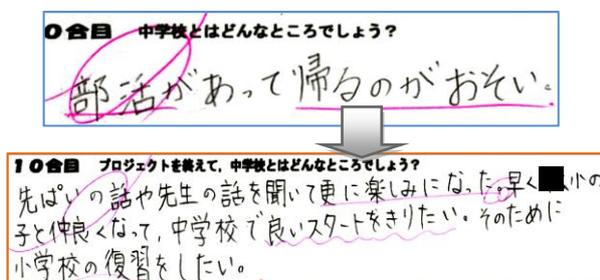


図 8-1 E 女児の記述

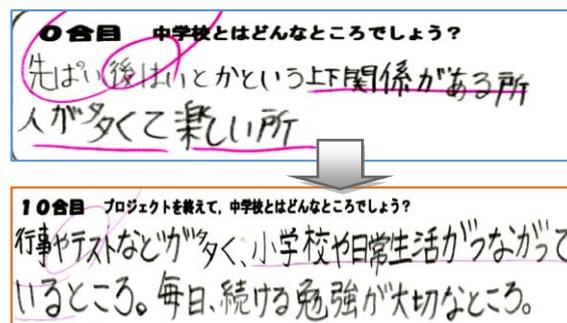


図 8-2 F 男児の記述

他にも、多くの児童の授業後の記述から進学を前向きにとらえ、入学する心がまえを新たにすることをみとることができた。アンケート結果とシートの記述から総合的に判断すると、昨年度の継続研究である小学校と中学校をつなぐ授業を行うことで、一定の成果を得ることができた。詳しい考察は4.(3)にまとめることとする。

(2) 「JUMP」授業実践の結果と考察

①授業実践の概要

まず、6月に中学生に意識調査を行った。高校に対して楽しみに思うこと、不安なこと、知りたいことを聞き、プロジェクト開始時の高校に対する各自の思いを把握した。その後協力校に出向き、研究内容の説明を行い、理解と協力をお願いした。高校生には事前に交流学习の内容を知らせ、担当決めや紹介内容を考えてもらうようにした。

7月に、A高校1年生1クラス(19名)がA中学校へ来校し、中学生の高校に対するイメージの具体化につながる交流学习を行った。8~9月には、中学生がオープンスクールや高校説明会等で高校を訪問し、交流学习で得た知識を、自分の目で確かめる機会をもった。プロジェクトのまとめとして、9月に進路学習発表会を行い、オープンスクールで得たことを学年の仲間と共有し、学びを深める時間を設けた。

### ②授業実践の工夫

一連の学習を通して、プロジェクトシート(図9)を用いた。各自の知りたいことが解決したところで記述する欄を設け、少しずつでも不安な点が減ったことが視覚化できるようにした。

J 自主的に U 生みだし M 見つける P プロジェクト				
「学び」の場				
高校とはどんなところでしょう? 自立した人を目標とする				
日付	楽しみなこと	不安なこと	知ること	解決したこと
3	お世話 ・学祭 ・友達	・勉強		
2			・勉強の強さと弱さ ・課題 ・ポイント	
1	お世話 ・先輩との交流 ・新しい友達		お世話 ・先輩との交流 ・新しい友達	
高校とはどんなところでしょう? 将来の夢に向かって過程で必要なことを学ぶ				

図9 プロジェクトシート

また、A高等学校がA中学校の同一地区内に存在するという利点を活かし、高校の定期テスト後の時間帯に1クラス全員の来校を実現できた。高校生の中にはA中学校の卒業生もおり、1学年上級の先輩方を大変身近に感じられたようである。中学生にとっては、高校生活について知らないことも多くあり、直接高校生に尋ねる交流学習を行ったことで、多くの問題解決ができたようである。(図11参照)

### ③授業実践の成果と課題

授業後のお礼状から、生徒の不安軽減の様子や、中学生のうちに頑張りたいことが読み取れる記述が多くみられた。ここに、2名の例を示す。

先日は、お忙しい中、中学校に来て下さり、ありがとうございました。高校を選んだ理由や、高校のテストの様子、中学校との違いなど、私たちに丁寧に教えて頂き、とてもわかりやすかったです。また、質問にも答えて下さり、わからない事や不安が少しなくなりました。これから、入試に向け「基本的なこと」を覚えていきます!!

図10-1 生徒Aの記述

生徒Aの記述(図10-1)には、「わからない事や不安が少しなくなりました」とある。高校生活の実態を知ることで、不安が軽減されたようである。

先日はお忙しい中、私たちのために、中学校に来て頂きありがとうございました。沢山の質問を1つ1つ丁寧に教えて頂きありがとうございました。先輩方から「自分、勉強することが大切」と教えてもらったので、中学生のうちに身に付けられるよう頑張りたいと思います。先輩も色々頑張ってください。ありがとうございました。

図10-2 生徒Bの記述

生徒Bは、「中学生のうちに身に付けられるよう頑張りたい」と記述(図10-2)しており、高校生からのアドバイスを自身の生活に活かそうとしていることがわかる。

以上のように、普段目にすることの多い、近所にある高校の生徒たちと交流でき、高校進学に向けての意欲の向上や、また、高校入学後の具体的な生活についての見通しがもてたことは、大きな成果と言える。

今回は1校のみの交流学習に留まったが、生徒たちの得たものは大変大きかったようである。全ての中学生が進学する様々な高校との交流をもつことは難しいことであるが、今後、このような交流の機会を増やせるとよいと感じる。



図11 高校生と交流する中学生

### (3) 2つの実践を通して

勤務校のある地区では、中学校区ごとに年に3回、「ブロック研究」と呼ばれる小・中の教員が一堂に会す学習会が行われている。その学習会においては、授業規律や児童生徒の生活の様子についての交流を行い、教師同士が共通理解を深めている。そこで、小学校の校長先生から、今後も「すてっぴ」プロジェクトを継続してほしいという要望をいただいた。本研究が、普段の生活のあいさつやルールについての小学校と中学校が歩み寄れるきっかけとなったのかもしれないと考えられる。

また、「すてっぴ」プロジェクトに参加した中学生の感想からは、「中学校生活にわくわくする小学生、それは高校生活にわくわくする私たちのようだった。だから、私はなるべく中学校のことを教え、少しでも中学校に興味をもってもらいたいと思った。」「最初は小さい子たちと授業なんて…と思っていたが、行ってみたら意外と楽しく、今日は本当に小学校に行ってよかった。」など、先輩として物事を教える立場を経験することにより、自己有用感を得られたと思われる記述がみられた。そして何より、普段の生活では見られないような生き生きとした表情で、「また小学校に行きたい」と言っていたことが効果を物語っていると感じた。

加えて、本年度実施した「JUMP」プロジェクトも、高校進学に向けて悩みや不安を多く感じている中学校3年生にとって、前述のとおり高校進学への具体的な見通しをもつ機会となった。

このような異年齢の交流学習を含む進路に関する取組は、教師の想像以上に子ども同士の学びがあるように思われる。今後も、地域の教師が手を取りあい、学校間接続時の不安軽減の一助となり得る様々な実践をするなかでよりよい児童生徒の育成を追究

していくことが求められる。

## 5. 今後の課題

国立教育政策研究所が発行している生徒指導リーフの「Leaf. 15「中1ギャップ」の真実」（平成26年4月）には、「中学校区単位で連携を進めていかなければ、中学校の課題が解消することはありません。」と記されている。また、「ギャップを作りだしているのも、それを埋めることができるのも教職員」とも記述されている。

まずは、勤務する中学校区の児童生徒の実態を教師がしっかりと把握し、課題をとらえ、共通認識をもつことが求められる。そして、各学校間で協働し、児童生徒の育成のためにできることを模索していくことが必要であると考えられる。

また、進学時の不安軽減という一定の効果がみられた本研究で行ったプロジェクトを、今後の学校生活の中で日常化し、継続していくことが今後の一番の課題である。取り組みが地域に根ざすものとなるよう、来年度以降も研究を深めていきたい。

## 6. 引用文献

- ・中央教育審議会初等中等教育分科会  
(2012)「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理（骨子案）」平成24年4月
- ・堀哲夫(2013)「教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性」p. 22, 東洋館出版社
- ・石川晋・石川拓・高橋正一(2009)「中1ギャップ 中学校生活になじむ指導のポイント」, 学事出版
- ・国立教育政策研究所(2014)「生徒指導リーフ Leaf. 15「中1ギャップ」の真実」
- ・児島宏・佐野金吾(2006)「中1ギャップの克服プログラム」, 明治図書
- ・文部科学省(2014)「児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査」